

# 芥川だより

発行日 \* 2021年7月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

印刷・発行 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*

## 私は共感を得る為に表現する



幾つになっても人は孤独で寂しいものだ。数えきれないほどの人がいても、自分の心情を理解してくれている人が見つからない想いがある。なんともやるせないことだが、この不安こそが私のエネルギーの源なのだと考える。日々生きる事には多くの不安が付きまとう。

誰もが、この不安を少しでも減らしたいと願っている。この願いこそが欲望を生み出す源泉のひとつだろう。その果てしない欲望の流れの一部は保険や多くの保証システムを生み出し一時の安らぎを求めるが、根本的な不安感が消えることはない。

消えることはない恐怖感を少しでも忘れさすような行動を人は考えた。音楽であったり絵画であったりなど多くの表現方法を見出した。その中でも言ったり書いたりする言語の発生・進化は最高のものに違いない。

自分でさえも分からない気持ちを人に伝えるのは至難の事である。刻々と移り行く心をどう相手に伝えるのか。コミュニケーションには身振り手振りや言葉など全身を使って行うことが多い。生きるということはコミュニケーションすることであり、独りでは生きていけない人が持つ宿命だ。

一枚の写真はある瞬間を撮ったものである。写真をつなげて物語性を織り込んだのが映画だ。エッセイも一枚の写真みたいなもので、何枚も書きつなげて物語を織り込めば立派な小説になるが、必ずしも映画や小説が一枚の写真や一片のエッセイより優れているとは限らない。如何に人の共感を得るかの切口を作者が持っているかが重要になる。何気ない日常の中で見つけ出す感性があるか、好奇心を持ち続けられるかがカギとなる。

自分の想いを表現する時には、他人を気にせず自分の感じたまま、思うがままに表現する勇気が一番大事だと考えている。忖度してあれこれ考えるより、自分の考えを掘り返し掘り返し深めることでしか、自分の不安感を減らすことは出来ないと思いつつ、葛藤する思考と折り合いをつけられずに生きているから、いくらでも活字が拾える。

死をめぐるあれやこれ(80)

それでも五輪は強行される

石川 吾郎

七月に入っていつの間にか東京五輪が開催されるのが既定路線になっている。五輪開催の意義について「コロナに打ち勝った証」という白々しいこと以外は、この国のリーダーの口からは出たことがない。メディアはただ無観客にするかどうかを注目するようになっていく。そしてアスリートの美談物語をNHKは流し続ける。◆五輪中止を主張する論者の幾人かは「インパール作戦に似ている」と批判している。食料も銃弾もなく、ただぬかるみを進軍して十数万もの日本兵が無意味に犠牲となったという「史上最悪の作戦」。だが私が一番納得できたのは、登山家・野口健氏が評した言葉だ。野口氏はこのコロナ状況で開催に突入していく政府の姿勢を「登山でいうと遭難にいたるパターンだ」と指摘している。これは的を得ている。冷静な頭で考えれば引き返すべきなのに、何か裏の事情がある時には目が曇って冷静さを失い、危険へと突入していく。◆五輪の場合、この事情はぼつたくり男爵や竹中某率いる人員派遣会社はじめとする莫大な利権へのおもんばかりなのだろうか。しかし、これと引き替えにされるのは、国民の生命リスクなのだ。政府と蜜月だった専門家さえ、コロナ流行第五波の可能性を危惧している。◆政府が奨励してきたコロナワクチンの接種も、高齢者がようやく山を超え、それ以下の年

齢に拡大しようとしたとたんに、ワクチンの品切れだと急ブレーキ。無理をして予約を受け付けた医療機関は、はしごをはずされた形になって医療現場は大混乱という。文字通りの玉切れ状態。やはり五輪開催は「インパール作戦」に似ている。◆もし仮に、この五輪が無事に終わって第五波もこなかったとしても、この政権が国民の生命をコロナのリスクに曝(さら)した、という事実は残る。この政府を存続させるかどうかは、秋の選挙がカギとなる……。

芥川だより一七四号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 80	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 88	坂本一光	2
哲学命いの時事放談 38	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 44	下村嘉明	6
新型コロナウイルス愚考(15) 明石幸次郎		7
オクラの山たより 58	因了生	7
隠された歴史 33	満田正賢	12
道をゆく 27	成瀬和之	14
マルクスから学ぶ(5)	成瀬和之	15
俳句	土田裕	16
	影山武司	16
編集後記	S K 生	17
ふみの道草 37	山椒魚	18

素老人☆よもだ帳(88)

坂本一光

◆沖縄全戦没者追悼式「平和の詩」

あれから七十六年が過ぎた。今年もまた六月二十三日がやってきた。沖縄では毎年、国籍を問わず、先の大戦中、沖縄戦において命を落とした全戦没者を追悼する式典が実施される。今年はコロナ感染防止のため参加者を極度に限って行われた。

「みるく世ぬならば世や直れ」

(平和なら、暮らしは良くなっていくよ)

降りしきる雨の中、透き通る声が会場に響いた。宮古島民謡『豊年の歌』の一節を引用した今年の「平和の詩」は、『みるく世(ゆ)の謳(うた)』であった。詩は、沖縄県内の小中高校生たちから寄せられた一五〇〇作品から選ばれたものである。この詩と同じ思いが、毎年毎年、子どもたちからも届けられる。その思いに答える世はいつ来るのか。「可能な限り沖縄の負担を減らす策を講じる」、菅首相のビデオメッセージの言葉が、雨にむなしく流れていた。

\*\*\*\*\*

みるく世(ゆ)の謳(うた)

宮古島市立西辺中学校2年 上原 美春

12歳。

初めて命の芽吹きを見た。  
生まれたばかりの姪(めい)は  
小さな胸を上下させ  
手足を一生懸命に動かし  
瞳に湖を閉じ込めて  
「おなかすいたよ」  
「オムツを替えて」と  
力一杯、声の限りに訴える

大きな泣き声をそっと抱き寄せられる  
今日は、  
平和だと思ふ。

赤ちゃんの泣き声を  
愛(いと) おしく思える今日は  
穏やかであると思ふ。

その可愛らしい重みを胸に抱き、  
6月の蒼天(そうてん)を仰いだ時  
一面の青を分断するセスナにのって  
私の思いは  
76年の時を超えていく

この空はきつと覚えている  
母の子守唄が空襲警報に消された出来  
事を

灯(とも)されたばかりの命が消されていく瞬間を

吹き抜けるこの風は覚えている  
うちなーぐちを取り上げられた沖縄を  
自らに混じった鉄の匂いを

踏みしめるこの土は覚えている  
まだ幼さの残る手に、銃を握らされた  
少年がいた事を  
おかえりを聞くことなく散った父の最後  
の叫びを

私は知っている  
礎(いしじ)を撫(な)でる皺(しわ)  
の手が  
何度も拭ってきた涙

あなたは知っている  
あれは現実だったこと  
煌(きら)びやかなサンゴ礁の底に  
深く沈められつつある  
悲しみが存在することを

凜(りん)と立つガジュマルが言う  
忘れるな、本当にあったのだ  
暗くしめった壕(ごう)の中が  
憎しみで満たされた日が  
本当にあったのだ

漆黒の空  
屍(しかばね)を避けて逃げた日が  
本当にあったのだ

血色の海

いくつもの生きるべき命の  
大きな鼓動が

岩を打つ波にかき消され  
万歳と投げ打たれた日が  
本当にあつたのだと

6月を彩る月桃が揺蕩(たゆた)う  
忘れないで、犠牲になっていい命など  
あつて良かったはずがない事を  
忘れないで、壊すのは、簡単だという  
事を  
もろく、危うく、だからこそ守るべき  
この暮らしを

忘れないで  
誰もが平和を祈っていた事を  
どうか忘れないで  
生きることの喜び  
あなたは生かされているのよと

いま摩文仁の丘に立ち  
私は歌いたい  
澄んだ酸素を肺いっぱいにとりこみ  
今日生きている喜びを震える声帯に感  
じて  
決意の声高らかに

みるく世ぬなうらば世や直れ  
平和な世界は私たちがつくるのだ

共に立つあなたに

感じて欲しい

滾(たぎ)る血潮に流れる先人の想(お  
も)い

共に立つあなたと

歌いたい

蒼穹(そうきゆう)へ響く癒(いや)  
しの歌

そよぐ島風にのせて

歌いたい

平和な未来へ届く魂の歌

私たちは忘れないこと

あの日の出来事を伝え続けること

繰り返さないこと

命の限り生きること

決意の歌を

歌いたい

いま摩文仁の丘に立ち

あの真太陽まで届けと祈る

みるく世ぬなうらば世や直れ

平和な世がやってくる

この世はきつと良くなっていくと

繫(つな)がれ続けてきたバトン

素晴らしい未来へと

信じ手渡されたバトン

生きとし生けるすべての尊い命のバト  
ン

今、私たちの中にある

暗黒の過去を溶かすことなく

あの過ちに再び身を投じることなく

繋ぎ続けたい

みるく世を創るのはここにいるわたし

達だ

\*\*\*\*\*

折しも、中国政府の圧力によって、香

港の人たちの声に寄り添ってきた『蘋果

日報』(リングゴ日報)紙が、六月二十四

日付朝刊をもって停刊に追い込まれたこ  
とを告げるニュースが世界中に流れた。

港人雨中痛別

(香港人、雨の中のつらい別れ)

の大見出しが、「蘋果支持」の言葉とと

もに、大雨の中を新聞社前に集まった

人々の写真の上に踊っていた。捲土重来

香港人「雨に別れて以来なり」

の再会はいつ果たされるだろうか。

戦争も平和も青い空の下

平和とは今日も明日を語ること

八月のあの青空にある答え

どうやら、単純なことは、複雑な世界で  
は簡単に実現できないカラクリがあるよ  
うだ。あの国においても、この国におい  
ても。

(かたちは心であり、心はかたちになる  
■大分の素老人)

## 哲学命いの時事放談(38)

祖蔵 哲

「平成」から「令和」に元号が切り替  
わったのは1019年5月。令和元年は  
8ヶ月間、令和2年は2020年1月1  
日から始はじまった。そして現在では令和  
3年の真ん中である。西暦と和暦を無理  
やり合わせているためにこのような不便  
なことが行われている。元号をいまだに  
使用している数少ない国、日本の場合、  
「大化」から江戸時代「慶応」までは災  
害や天変地異などの理由で頻繁に改元が  
行われてきたようだが、「明治」以降は明  
治天皇が発布した一世一元の制に基づき  
新天皇の即位による「代始改元」実施し  
てきている。

そもそも、元号は、権力者が時間を支  
配することと結びついてきたものだ。  
それゆえ

それは吉事をもたらし凶事を避けねばな  
らない。元号の名前「名付け」は重要な  
意味をもっていた。天災であれ人災であ

れ、そして自らの失政であれ悪いことが続けば、元号のせいにされ躊躇なく改元された。平安期以後、陰陽思想や御霊信仰の流行もあり、政治における意思決定プロセスにも迷信や俗信の類いが色濃く影を落としたのであろう。また、改元には「リセット感」を広く流布し、「新たな気持ちで頑張ろう」と民衆を鼓舞する側面もあった。

振り返って現代、令和元年には京アニ放火殺人、そして台風15、19号の記録的豪雨による河川の氾濫、土砂崩れが相次ぎ甚大な被害が関東甲信と東北を中心に発生し、凶事が連続している。そして決定的なのが今も続く平成29年発のCovid19「コロナ禍」である。さらに令和2年には政治不信による大混乱で突然の総理交代、オリンピック問題などの混乱や不信は今も続いている。凶事に際してその影響を断ち切るための年号改定を「災異改元」というらしい。いつそのこと令和も厄払い改元したらどうか。国民の合意があればできるのであろうか。

もともと「令和」の「令」も批判的な意見が多くあった。多くの人が命令という漢字がすぐ思い浮かんだように、令という字には、上から下に指示を出すときに使う文字という印象である。家制度がなくなり、個人の時代となっている今の時代にそぐわないのではと思った。しかし、「専門家」の意見はもう少し学問的にレアな説明をする。それは令嬢とか令月

という、りっぱな、めでたいという意味であるとか。それはそうかもしれないが国民感情からは大きくずれている。言葉というものは時代とともに変化するものである。

さて、言葉に対するイメージであるが、この「命令」のように、これは上から下への指示を表現している。「命令を下す」というが、「命令を差し上げる」とは言わない。なぜなのだろう、言葉の不思議である。今月はこの言葉の不思議を哲学してみよう。

#### (1) ステイグマとは

さて、「名前」「名付ける」といえば最近、この「コロナ禍」での新型コロナウイルスの変異株名称をWHOが国名を使うことを禁止して「デルタ株」などというギリシア文字に統一したという話題がある。その理由が特定の国への偏見や風評被害を回避するためということである。新型コロナウイルスの呼び名といえば、当初アメリカ大統領だったトランプも「チャイナウイルス」と盛んに騒ぎ立てていた。今でもその信者は「武漢ウイルス」と言っている。しかし、WHOの動きは今に始まったことではなく、すでに2015年「新しい感染症に関する提言」で病名について言及している。避けるべき用語として「地理的な場所」や「人名」、「動物や食品の種類」などを挙げている。「豚インフルエンザ」やかつての「スペイン風邪」などもこの

例である。

人間はなぜ病名にこのような不適切な名前をつけるのか。それは人が「病気」にかかわらず何か「未知のもの」を恐れるという本性をもっているからであろう。そしてそれを自分以外の「他者」として敵対的に区別し自分を守ると傾向、防衛本能がある。これが、「名づけ」の行為の原点であるかもしれない。なぜなら、人間は社会的動物だからである。一人では生きられなくて集団としてしか存在できない単独では弱い個体である。未知の敵対物に対して共同して防衛にあたるために識別するための名前である。その「敵対他者」として名づけられた「名前」は家族、共同体、社会に拡散して知られていく。結果「名前」が独り歩きをして、

集団は実物を経験しなくてもその「名前」だけで敵対反応を感じ警戒をするのである。このような「名づけ」が協力、協同に向かうのではなく、社会的偏見や差別を助長することを「社会的ステイグマ」と呼ぶ。ステイグマ (stigma) とはもともと古代ギリシア語で牛や奴隷に焼きつけられた刻印をさした。そこから「新約聖書」では、イエス・キリストが十字架にかけられて処刑された時に残った、四肢の掌と足の甲にある傷跡をさし、生前その瘡痕が現れたために聖痕ともよばれるようになった。隠されたものが、暴露された時に、その人の属性があらわになる

という意味に転用される。現在では、暴露されていない、汚名や恥辱という意味になった。差別対象の烙印を押されるという意味だ。

では、この病名のステイグマが社会にとつてどのような悪影響がでるのか。まず、この烙印は、差別を避けるために疾患を隠すよう人々を駆り立て、人々がすぐに医療を受けることを阻害し、人々が健康的な行動をとる意欲を損なわせるのである。結局、このような行為は社会全体にとつては何らの利益をもたらさず、マイナスのみである。

#### (2) 病は外からやってくる

西欧世界にとつて疫病は、古来より外部 (アジアの奥) からやってくるものであった。それは、西欧こそが特権的な文化の場であるという何世紀来の思い込みの結果である。動物的な病気の原因は常に文化の程度の低い地域からもたらされるという偏見だ。しかし、これは重大な事実を忘れていて、大航海時代、西欧列強は南米大陸、やアフリカ大陸で自ら持つ感染症を植民地に持ち込み、多くの文明を破壊してきた自らの罪である。しかし、この西欧至上主義の偏見は今も続いている。新型コロナウイルスはアジアの「中国」からもたらされ、さらにより強力な変異株もアジア由来であると躍起になっている。このように強者にとつて、病気を想像することは、外部を想像することであ

る。「外部」「侵入者」のイメージは「移民排斥」の思想にもつながっている。

### (3) 「名づけ」と「喩え」

「未知のもの」との遭遇、特に病気に關しては古代より様々な「名前と感情―行動」の関係を露わにしている。かつて「ペスト」や「ハンセン氏病」、「結核」などはその治療法がなかったころは「恐ろしい」「侵入」「隔離」などという言葉が容易に連想された。現在、いまだ完全な治療法が確立されていない癌やもちろんウイルスに關してもことは進行中である。しかし、この言葉による偏見は近代によって作られた現象である。古来、病気は自然現象によるものであり、天災と同じく全員平等にかかるものであった。しかし、近代になり医学が発達すると病気は治療可能なものとなり、避けられるものとなった。病気にかかるものは「気の緩み」「自堕落」「不摂生」など個人のせい、つまり「自己責任」に帰せられるようになる。そして、病気は恥ずべきものとなり隠されていく。つまり、病気の名前は直接症状などを指すのではなく何か「喩えられる」ものに変化していくのである。

### (4) 比喩から隠喩(メタファー)へ

ある対象を何かに喩えて言うことを「比喩」という。これは修辞学というレトリック、つまり効果的な言語表現の技

術の一分野であるが、それは単なる学問ではなく、我々が自然に行っている会話の表現である。それを比喩であるとは私たちは普段なかなか「気づいて」いない。そう、この「気づく」自体も比喩である。自分の「気・意識」が対象に「付く」。つまり、意識が対象に接近してそこに貼りつくという「喩え」である。

このように言語の「比喩」は日常の言語行為である。例えば、爺いがいつも悩まされる「締め切り」のような時間的なものを具体的に見えるようにする比喩とか。また、「原稿を書く」「黒板を消す」といったような、対象である部分「文字」をその全体で置き換えるといった手の込んだものまである。これらを私たちは自然に自由に使って表現しているのである。

分類的にいうと、「このような」という言葉を使つて「比喩」をするのを「直喩」と言い、そのような言葉を用いないのを「隠喩(メタファー)」と呼ぶ。例えば「頭が石のように重い」は「直喩」で、かつての「ペスト」の病名「黒死病」は「黒い死体のようになる病気」の「隠喩」である。「コロナウイルス」これも無論、隠喩。「コロナ」とはもともと「王冠」の意。太陽のコロナもウイルスのコロナも「王冠(のような形)」をしたものだからである。

比喩の長所は、何か未知のものを既知のものに例えるから、そのものが理解しやすくなる。一方、短所はその例えがど

んどんと実態から離れていった場合、「事実」が覆い隠されてしまう危険性がある。特に「隠喩」は「のように」という言葉を使わずに断定してしまう傾向にあるため誤解を生む。またこれを悪用する人も出てくる。「彼女は悪魔のように魅力的だ」という「直喩」が「彼女は悪魔だ」の「隠喩」に変わるように。

### (5) 軍事メタファー

「病気は外からやってくる」という話を先にした。「外部」「敵」「侵入」というイメージは容易に「戦争」と結びつく。そして、この「コロナ禍」でこのメタファーは世間であふれている。特に政治家の発言が目立つ。前トランプ大統領は「戦時下の大統領」だと述べ、アメリカは感染が拡大する新型コロナウイルスに「完全な勝利」を収めるだろうと誓った。そして重要な医療用品の増産を民間企業に求めることができる、朝鮮戦争下の1950年に成立した「国防生産法」を復活させた。さらにトランプはこのメタファーの限界を乗り越えCOVID-19が中国の「生物兵器」であると断定した。ここまでメタファーが度を越した例は少ないが多くの国民はそう信じたのである。もちろん政治家だけでなく「コロナとの闘い」「ウイルスが細胞を攻撃する」「免疫が防衛機構になる」「国民全員の総力戦」といった言葉はマスコミ報道を通して流される。まさに世界は「戦時中」なのである。

「戦争」メタファーはプロバガンダである。病いに対して「隠喩」を使うと、「戦争に勝つ」という大義のために個人の自律性が制限されてもやむを得ないと示唆する。拡大予防のための外出制限は事実上の隔離ともいえるが、フランスの哲学者ミシェル・フーコーは『近代医学の誕生』の中で、「公衆衛生とは、隔離の洗練されたかたち」といい、公衆衛生の社会統制の側面を指摘している。ひとたび感染症が起こると、都市は細分化され、それぞれの空間は綿密に分析され、絶えず記録がとられるという「監視された軍事的モデル」が適用されるのである。軍事メタファーは「民主主義」の対義体制、「権威主義」を強化する。先月号で「民主主義」が「全体主義」に移行するプロセスを哲学したが、結果的には正常な医療、福祉も阻止されるのである。

マスクの着用も社会的距離をとることも、感染のリスクを社会全体の努力で回避することを意味する。それを、個人々々に対する社会的統制ではなくて、他者への自発的な配慮「利他」として実現させることが重要である。社会は、バラバラの個人で構成されているのではなく、他者を恐れる人々で構成されているのでもなく、信頼と思いやりによって結びついているのである。「真実」については世間のメタファーで考えるのではなく、自分の頭で考え、自己の言葉で喩えなければならぬ。「他者を思いやること」(利他)

が結局のところ「自分にとって最良」「自己」になる社会をメタファーすべきである。

パンデミックは、多くの市民が公共性について改めて考える契機となる。「公共社会」は言葉で構成されているものであるともいえる。その「言葉」を考える、「哲学」することは世界を考えることでもある。さらに「哲学」をしよう。

## 大峯奥駈道(44)

下村 嘉朗

今日は、初めて味わうような清々しい気分だ。一昨日と昨日に、田舎の同級生が講長を務めている京都丹波大峰講に参加させていただいたお陰だと思ふ。コロナ禍であったがワクチン接種を2回受けて参加した。参加者は12名で最年長者は75歳でした。講長の山口君は18回参拝した大先達。親の葬式以外は毎年参加してきた強者です。見かけは、小太りした普通の百姓の爺さんです。彼曰く、毎回、こんなしんどい事なら、もう来年はやめようと、思うそうですが、日がたてば、苦しかったことを忘れて、また登ろうと思ひ出すようです。そんな事を2

0年も続けてきたそうです。彼のおおらかな人柄かもしれませんが、少数の講を永年守り続けてきた和知人の底力なのでしょう。

彼の話では、昔は真言宗が地元で盛んで上和知の4か村ぐらいの人たちが大峰講をやっていたそうです。その後、宗派替えが強制され曹洞宗に変わったとか。そんな中でも大峰講を続けてきた人たちがいて今につながっているそうです。しかし、若者の神仏離れが進み参加者が減り年配の人たちが多くなり先行きが怪しいと言っています。

私は、大峰奥駈道を登っていた時に白装束を身にまとった修験者を幾人か見えたので山岳修験道に興味があったが、身近に接する機会がなかったのだが、幸いにして機会が訪れてその神髄を垣間見たくて参加したわけです。

一行は、4時半に和知からマイクロバスで出発して途中で参加者を乗せて大峰山登山口の大橋茶屋駐車場に9時半に着いた。一方、私は尼崎なのでマイクロバスに便乗するのが難しく単独で車で行き現地集合にしてみました。

私は早くに家を出て駐車場にて待つことにした。早朝なので早く洞川温泉に着いたのだが、登山口に行く橋を渡らずに直進したら細い林道になったが地図を確かめず進んでいくとますます細い道になり対向車が来ればバックも出来ないような道に入り込んでしまった。うわさに聞

いていた奈良県道48号線だと気づいた時にはすでに遅し、小南トンネル入り口に差しかかった時、岸壁を手でくり抜いたようなデコボコの狭い側壁、低い天井

普通車の通行は不可能かと思つたが引き返す場所も無い、運転している車はホンダのヴェルデで車幅が結構あるのだが、イチかバチかで進んだ。無事に出られたと思つたら更に曲がりくねった細いヘアピンカーブが続く、対向車が来ない事を祈つて飛ばす。冷や汗を背中にじっとりにじませながら、黒滝村に何とかついた。ああこれで助かった。

もし対向車があれば、車を置いて逃げ出したいようなところだから、相手の車にバックしてもらう以外に方法は無いのだが、はたして相手は地元の慣れたドライバーならいいけど、私のような県外者だったら、万事休すだ。こんな道が県道とは恐れ入る。登山口の駐車場で管理している若い人に話すと、48号線を通る地元の人は、500メートルぐらいは、平気でアクセルを踏みながらバックしますよ。そうでなければ、あの道は通れない。よく普通車で通つてきましたね。と半分呆れ顔でした。

さて、無事に駐車場に着いて待つこと2時間、9時半になってようやくマイクロバスが到着した。12名の参加者が下りてきた。皆さんに挨拶しながら、行事予定のパンフレットとおやつ、京都丹波大峰講の手ぬぐいをもらい鉢巻きにする。

今夜の宿である「さら徳旅館」の車に着替へなど登山に不要なものを預ける。

## 峰入り

洞川の案内人が先導して登っていくのだが、登山口にある祠の仏像に登山の安全を祈願し講長が祝詞を挙げ、皆で般若心経を唱える。何かの祠や仏像があれば般若心経を唱える。私が奥駈道で見たのと同じだ。少し歩くと案内人が「ざあんげーさんげ、ろっこんしようじょ」と大きな声で唱える。みんなも大きな声で唱和して登っていく。

みんなが唱和する「懺悔、懺悔、六根清浄」のなかに山岳修験道の根本理念が表現されているように感じた。神仏と一体になるためには、過去のいろいろな気持ちを捨て、新たな心を持つ。欲望が神仏と一体化するのを妨げる大きな要因であるから、欲望を捨てよ！過去の行いを悔い改め懺悔せよ。そうすれば清々しい心と体に生まれ変わる。

しかし、人の欲は雑草のように次から次へと生まれて人を悩ませる。この欲を何とかして減らし、モグラたたきのように、すぐに顔をだす欲望を般若心経を唱えることで叩き、歩くことで心身を鍛え「空」なる感覚を瞬間でも感じさせる。この山岳修験道は役行者によって始まったと言われる。1300年前の話である。役行者は前鬼と後鬼を従え夏場は大峰山で小さな庵を建て修行し冬場は洞川の龍

泉寺で修行したので、大峰山寺と龍泉寺が役行者のゆかりの寺である。

途中3回ほど休み大峰山寺に着いた。手前の行場である岩登りを案内人に指導してもらいながら登った。スタンスもホールドもしつかりした小さな岩場なので初めての新客户も問題なく登れた。続いて西の視きを体験した。テレビでもお馴染みの光景だ。やってみると、臨場感があつて確かに怖い。何を聞かれても「はい、はい」の連発だ。

その後、大峰山寺の中に入れてもらい般若心経を唱える。線香も供えた。

寺の反対側にある博物館も見学し、歴代に寄贈された多くの額を見た。大きなものは、畳2枚ぐらいの大きな木に見事な彫刻がされていた。さぞかし、金もかかり、持ち上げるのも大変だったろうと思う。以前、大峰山寺の前を通過した時にも感じたのだが、山の頂に広い水平な場所を見て、人の手で岩を削ったんだらうと想像した。

今のように大きな大峰山寺になったのは後世の事で初めは小さな小屋程度であったはずだ。それが、時代を経るたびに大きな寺になったのだらう。どれほど多くの人の労力がいったか計り知れない。

大峰山寺の参拝が終わり下山する。上部では下山専用の道を下る。階段が幾段も続く。この道を歩きながら、以前、吉野から4月末登った時の事を思い出した。吹雪で階段が氷ついていてアイゼンを付け

て登った。長く続く凍った木の階段は滑りやすく怖かった。この登りで完全にバテタ思い出がある。

登り道は楽に登れたから、あの時も登り道に登っておけばよかったのだ。(次号につづく)

### 新型コロナウイルス禍愚考(その15)

明石 幸次郎

コロナウイルス感染拡大が収まらない中、東京オリンピック開催は、前首相から託された国民的最重要課題とばかりに、世論の声は聞かずに7月23日開催に向けて、何が何でも自分の力でやるとばかりに菅首相は動いています。

東京都知事は、これには入院して沈黙し、与党、共産党以外の野党、マスコミも流れに棹差すことはせずに、結果として国を挙げて開催する雰囲気になっています。

ジャーナリストの池上彰さんによると、元々、中国で新型コロナウイルス感染が生じて、日本にも広がる恐れが出てきて一昨年に当時の東京オリンピック、パ

ラリンピック組織委員会会長のあの森さんが、安部首相に2020年の開催を2年程遅らせてはと助言したところ「いや、いや、オールジャパンの総力を挙げたらワクチンでも開発出来て、1年後に開催は可能ですよ」と応えたということだ。

これは、自分がスーパーマリオの恰好でリオデジャネイロではしゃいで東京開催を勝ち取った。それで、オリンピックを「桜を見る会」以上に自分が遙かに盛り上げて、世界から賞賛され、その功績と大震災、福島原発から復興を成し遂げた名宰相として、父親を超えて祖父と同格の名声を残すという私欲が働いたと思います。

オリンピック開催を最重要ミッションであると託された菅首相が何としても、真面目に取り組む姿は、戦前の帝国陸軍の栄光を担い戦争の流れに国力と国民の犠牲も考えず神国は不敗と真面目に考え、ヒットラーの勢いに乗り遅れるなど開戦という流れを作った東条首相兼陸軍大臣を思い浮かべます。

まあ、神風が吹き何とかオリンピック開催に漕ぎつけて、オリンピックの日本選手はコロナ禍の中頑張つて、日の丸を挙げてくれて、元気が出たので、まあ、良かったと来月号に書いているかもしれませんが。

そしてお祭りの後、9月の総選挙に日本の今の大多数の政治家同様に無思想、無原則、無定見の私も、野党もなにもし

ないので、まあ、オリンピックご祝儀で自民党に入れとこかと真面目な？ 楽天的高齢者の一人として投票するのも知れません。

それは、孫の代になり、気候変動、大災害、食糧難、それに伴う戦争という大問題が起きると予想されても、そんなのは、起こらないと楽観視して先送りしている今の日本の各界のリーダーに加担してしまふことになり、死ぬ前に後悔を残し、「すまんなあ」と力なく呟き、召されて行く自分の姿かも知れません——！

### オクラの山たより(58)

困了生

与謝蕪村の「老いらくの恋」の相手である小糸は祇園の妓女でした。この小糸の名が最初に登場するのは一七八〇(安永九)年と推定される三月六日付けの断簡です。

かの小糸となん申す美人と我々、□□の様に候。昨日、嵐山へ月溪を同道し、文山子にあい候。

との記述です（文中の□□□には「相乗り」または「お察し」が入ると考えられています）。このとき蕪村は六十五歳。当代一流の画家である彼の眼識をして手放しで「美人」と言わしめた小糸は可愛らしくも美しい女性であったことでしょう。また、同時にこの表現には蕪村の小糸に向けた眼差しの熱さもうかがえます。

翌日の三月七日にさつそく几董宛に出した書簡には

昨日は銅脈子御誘引くだされ、嵐山へ参り候ふて、雨降り難儀いたし候。しかし、帰路は杉月楼の佳興あまた御座候。

銅脈子は聖護院宮に使えた武士の畠中観斎。漢詩・狂詩の作者として著名でした。杉月楼は蕪村がよく通った料亭。鴨川丸太町橋西詰の三本木にあったと推定されます。この杉月楼で小糸も交えた一行はたいそう楽しい時間を過ごしたことでしよう。この嵐山行き少し前に几董が編んだ「几董初懐紙」に左の句を蕪村は入集しています。おそらく作られたのは一七七九（安永八）年も押し詰まった頃です。

妹（いも）が垣ね 三味線草の花咲きぬ

全体の句意は「恋しい人の家の垣根には

三味線草の白い花が咲いている。家の外に出て来ないかなあ」で、「妹」とは愛する女性のこと、「三味線草」とは別名「ペンペン草」といい「薺（なずな）」のことです。「ペンペン」は当時の幼児語で三味線のこと、あえて幼児語を使っていることから「妹」が幼さを残した可憐な面影を持った少女であることを連想させます。そして、「糸」は三味線の異名でもあります。この句はこうしたことから祇園の妓女小糸に初めて逢った頃の初々しい自分の心をうたった句だといわれています。

ただし、以前にも述べたように祇園に通う経済力のない蕪村は、いくら小糸を忘れることができず慕う心が大きくなったとしても、ただただ小糸がいる妓楼の外をさまようより仕方がなかったらうと想像できます。その心境がこの句にある、というわけですね。

こうして美人の小糸に心を奪われていく蕪村ですが、小糸とはいかなる女性なのか。それを示す資料は極めて少なく、蕪村の残した書簡からうかがい知るしかありません。

小糸の美しさに出会った時期とほぼ軌を一にするかのように、蕪村は酒席の逸楽に沈淪し、華やかな芝居の世界にひたり、遊山を楽しむなどの遊興の日々を過ごすことが目立つようになります。当然のことながらそうしたときには先述の嵐

山行きと同様に小糸が同席したということも多かったようです。

たとえば、天明二年十一月五日付の几董宛の書簡では小糸らを連れて芝居見物をしたことを次のように書いています。

（あなたも）顔見世御見物のよし、愚老も佳業催しにて見申し候。けしからぬ大入り、昨日の棧敷も……向こうの正面にて、小雛・小糸・石松などにて見申し候。佳業は用事につき七ツ過ぎに見え候て、それまでは愚老、山の大将、大見えにて、大魯が胸中にて見物いたし候。高しの太夫なども見え候。これらも東の十四、五間めにて見て居り候。……花やかなる事ども、まこと都の風流、田舎には又夢にも見られぬ光景にて候。

この書簡には蕪村が佳業の招待で小雛・小糸・石松らの祇園の妓女と連れだつて中山座で顔見世狂言の歌舞伎見物をしたことが生き生きと書かれています。

「佳業催し」とは費用はすべて佳業つまり富裕な門人である書肆汲古堂の主人田中庄兵衛がもつたということ。つまり、佳業の「おごり」です。「けしからぬ大入り」は「とんでもないほどの大入り」のこと、「棧敷も……向こうの正面」とは棧敷席が二階の舞台正面の一等席であったということ。大魯は元武士で女性に「大もて」の人でした。「高しの太

夫」は御所の御典医高階太夫のことで、そうした階層の人でも棧敷の下の前から十四、五目という後ろの席にいるしかなく、一等席の舞台に向つて正面に祇園のきれいどころを三人もはべらせた蕪村の姿を想像してみてください。しかも招待主である佳業が遅れてくるまでの間、蕪村一人の「お山の大将」とばかりに「大見え」を切るという大得意ぶりです。日頃、いばっている御所の御典医を上から見下ろすというのも痛快がついています。

この時代、京の歌舞伎では十一月一日から十日間、顔見世興行が行われ京都の民衆の関心が集中して大入りの大盛況であったといえます。そうした状況でありましたから、当時の風俗史料に次のような記述があります。

顔見世の間、京阪ともに娼妓これを見ざるを恥とす。京師祇園町は特にこれを見るを誉（ほま）れとし、興行十日の間、虚実なくこれを見るを、その芸子の名譽とすることなり。

「守貞漫稿」（雜劇の項）

この資料からすると京の妓女たちの顔見世興行への関心の強さはかなりのものであり、特に祇園にあつては遊里特有の妓女たちの自尊心が働いたのでしょうか、特にその傾向が顕著であったことが分かります。



とすれば祇園の妓女である小糸は彼女の面目にかけて顔見世見物を自分に首ったけの蕪村にねだったことは容易に想像できます。向こう棧敷の一等席に陣取った小糸は、小雛、石松らの傍輩とともに有頂天になっていたはずで、当時の川柳に

押し合いにけり 押し合いにけり

棧敷から 人を汚い ものに見る

一七六一(宝曆十二年「万句合」より)

とあるような上流階級の意識も小糸を満足させていたはずで、

それは祇園のきれいどころを三人も一等席にはべらせた蕪村も同じことです。

蕪村が生きていた時代では顔見世興行は、夜の暗いうちから始まり、深夜に一旦打ち切り、夜が明けて続演してその日の夕方に終わるのがならわしでした。

たとえば、蕪村の「顔見世図賛」にも「顔見世を見るたより良ければとて、先斗町……に先の夜よりやどりして……や

やまどろまんとしけるに、鴨の河風吹き送るやぐら太鼓の声、『そぞろに枕の夢をおどるかすは、北か南か』とあります。「見たより良ければ」とは「見物するの具合が良いので」の意で「やぐら太鼓」は芝居開始を告げる櫓太鼓のことであり、「北か南か」は四条通りの南北に当時あった芝居小屋のことです。なお、この「賛」が書かれている蕪村筆の

「顔見世図」には夜着に足を入れて、後ろ向きに寝そべっている男が描かれています。

それはともかく天明二年の蕪村です。

十一月四日に顔見世見物をした蕪村は前日から見物をしており、その夜は祇園で宿つたと推定されます。不適切な関係がもたれたか、と誰もが思いますが、次の二つの句もこうしたことから見ると意味深長です。「恋に題す」と前書きのある二句です。

① 顔見世や 夜着を離るる 妹がもと

② 顔見世や すでに浮世の 飯時分

右の二句は一七六八(明和五)年十一月四日の句会の兼題「顔見世」による作と推定されています。しかし、蕪村晩年の自撰句集「蕪村句集」では「恋」の連作題でまとめられています。句が作られた時期からいけば①の句の「妹」は一条戻り橋の妓女「綱」の可能性が強いのですが、「蕪村句集」を編集した頃の蕪村の心にあるのは祇園の妓女小糸と思われるから、小糸と「妹」と解釈し直されて「恋に題す」とまとめられたと考えるのもいいでしょう。

①の句の句意は、この小糸と顔見世見物のために夜の祇園に宿ったときの情景です。読み方によってはかなりきわどい句です。②は華やかな歌舞伎舞台の別世

界の時間に浸っている作者が俗世界の時間を思いやった句。自分は別世界にいるが、俗世ではそろそろ朝食か、ということでしょう。

この顔見世見物の一件、祇園の妓女たちにもモテモテの状態は、蕪村にとっては井原西鶴の描く「好色一代男」の世之介のような色男になった気分であったにちがいありません。「愚老 山の大將」と得意がっているのも当然だったのです。

ただ、繰り返しますが、その費用はすべて佳業の「おごり」でした。悲しいことに蕪村にはこれだけのことをする経済力は逆立ちしてもなかったのです。

## 二

年若い人のように日に日に高まる小糸への思い。されど足を引つ張る手元不如意。いきおい佳業への催促の頻度が高くなつていきます。この時期に佳業宛に出された書簡におもしろいことが書かれています。

いつもとは申しながら、この節季、金ほしやと思ふことに候。けふはあまりのことに手水鉢にむかい、かかる身ぶり(現存する自筆の書簡では、ここ

のところ蕪村は自分が柄杓で手水鉢を打っている絵を挿絵として描いています)いたし候得ども、「その金、ここに」といふ人なきを恨み候。されど

も、この雪ただも見過ごしがたく候。二軒茶屋中村屋へと出かけ申すべく候。いづれ御出馬くださるべく候。是非是非。以上。

二十七日

佳業福人

蕪村

ひたすら小糸に逢いたい心で「金が欲しい」と蕪村は手水鉢を「無間(むけん)の鐘」に見立てて柄杓を振り上げて叩こうというのです。これは浄瑠璃の「ひらがな盛衰記」の中で遊女が「ああ、金が欲しいなあ」と手水鉢を無間の鐘に見立てて柄杓で叩くと「その金、ここに」と小判三百両が二階の障子の内からパラリと投げ出される、という場面をそっくりなぞったものです。「無間の鐘」はそれを叩くとこの世では富裕になれてもあの世では無間地獄に落ちるといふ恐ろしい鐘。そのしぐさを絵に描いてまでして期待しているのは佳業福人が「その金、ここに」と言つて小判をパラパラと投げ出してくれることです。芝居好きであった蕪村らしい手紙です。小糸に逢いたくて仕方がないが、自分にはそんな金はない、結局は佳業のフトコロにすぎるとはなれない焦りと腹立たしさが、ここには見えてきます。

この書簡で蕪村が佳業を誘った二軒茶屋中村屋は八坂神社の楼門の前であった二軒の茶屋で中村屋はその一つ。今もある八坂神社の楼門西にある中村楼の前身

です。どうやら小糸との待合の場にご  
を使っていたと考えられます。

資金は佳棠だのみとはいえ蕪村の思  
は恋する青年のようについついきま  
す。

夜前は杉月へまかりこし、大酒にて、  
今日はふらふらと心地あしく候。され  
ども心ほのめき候。しかし、雛・糸を  
欠きて、これのみ遺憾に候。琴野をは  
じめそのほか四、五人参り候へども、  
いやはや同日の論にては御座なく候。

(宛先年次不明・十二月二十二日付)

行きつけの料亭杉月楼での酒宴に、ひい  
きにしていた小雛と小糸、特に小糸が姿  
を見せなかったことに、あらわな落胆の  
様子を示しています。この時期の蕪村に  
とって小糸はかけがえのない存在となっ  
ていて、琴野その他、その場に同席して  
いた美妓たちは眼中になかったよう  
です。ひどい二日酔いをするほどの深酒の  
原因は小糸の逢瀬がかなわなかった寂し  
さにあったのかもしれませんが。駄々をこ  
ねている幼児のような姿は可愛らしいと  
いつてもいいでしょう。

### 三

この小糸に向けて蕪村の愛情があふれ  
出ているような書簡が残っています。宛  
先は蕪村のパトロンともいべき佳棠

で、天明二年五月二十六日に出されたら  
しい書簡です。少し長いですが、全文を  
載せます。

小糸かたより申し越し候は、白練り  
の裕(あわせ)に山水を描きくれ候様に  
とのことに御座候。これは悪しき物好  
きと存じ候。我ら書き候ひては殊のほ  
かきたなく成り候ひて、美人には取り  
合はせ甚だしく悪しく候。やはり梅亭  
しかるべく候。梅亭は毎度美人の衣服  
に書き覚え候故、模様取り、かたがた  
甚だよろしく候。小糸、右の道理を知  
らずしての物好きと存ぜられ候。我ら  
が画きたるを見候はば、却て小糸後悔  
すべしと、気の毒に候。

小糸ことに候ゆゑ、何をたのみ候ひ  
ても、否とは申さずと候へども、物好  
き悪しく候ひては、西施に入れ墨いた  
すようなる物にて、美人の形容、見劣  
り申すべくと、いたはしく候。二、三  
日中に右拾仕立て候ひて、持たせ遣は  
し候ふよし申し遣わし候。どうぞ小糸  
に御逢ひなされ候ひて、とくと御申し  
聞かせ下さるべく候。縷々、筆談に尽  
くしがたく候。何事も貴顔御物語りと  
申し残し候。以上。

五月二十六日

返す返す、小糸、求めならば、此方  
より望み候ひても画き申したき物に  
候。右のほかの画ならば、何なりとも

申し遣わし候様、御申し伝へ下さるべ  
く候。

白い練絹(練って柔らかくした白い絹の布  
地)の裕(裏地付きの着物のこと)に山水画  
(風景画)を描いてくれと、小糸からね  
だられて困っている蕪村の様子が手に取  
るように伝わってくる書簡です。祇園の  
若い美女の白練絹の裕に文人画を描くな  
どは前代未聞のこと。蕪村は仰天したに  
ちがいありません。今日で指折りの画家  
だというプライドがどうのこうのという  
以前の問題だ、小糸といえどもあまりに  
悪趣味がすぎる、と蕪村は言いたげです。  
「西施に入れ墨いたすようなる物」とま  
で言っています。「西施」とは中国古代  
の越の美女。この西施のために呉の国は  
亡びました。美女をあらわす「傾国」の  
語源となった女性です。美しいものに入  
れ墨を入れて汚すようなことをするなん  
て、美への冒瀆だ、信じられん、小糸は  
まるでわかっていない、とムツとするの  
ですが、一方で蕪村はかわい小糸から  
ねだられたことが嬉しくて仕方がないの  
です。しかし、さすがにこればかりは  
御勘弁と、門人の梅亭(紀時敏。通称は  
立花屋九兵衛。俳人にして画人)を紹介  
しているのが、蕪村の困惑ぶりがうかが  
われてとてもおもしろい。しかも、なお  
言い足らず、追伸に、これ以外のことな  
ら、こちらから御願ひしても小糸のた  
めに描きたいものを、と未練たつぷりに

いつています。

なぜ描いてやれないかの説明をしてほ  
しいと念入りに依頼している相手は佳棠  
です。経済的な支援、こうした面倒なこ  
との仲立ち。佳棠が蕪村と小糸の二人の  
間の介在者であったことは間違いないで  
しょう。

### 四

小糸に夢中の蕪村は当然のことながら  
自分の老いといやおうなく向き合ってい  
ました。松尾芭蕉の「吉野にて桜みせう  
ぞ檜の傘」を材料に好んで吉野を尋ねた  
芭蕉とは違い、出不精の我が身のさまを  
蕪村は語っています。

「吉野にて桜みせうぞ檜の傘」と、  
吉野の旅に急がれし風流は慕はず、家  
にのみありて、浮き世のわざに苦しみ、  
そのことはとやせまし、このことはか  
くやあらんなど、かねておもひはかり  
しことども、えはたさず、つひには煙  
霞花鳥に辜負するためしは、多く世の  
ありさまなれど、今さら我のみ愚かな  
るようにて、人に相見えん面もあらぬ  
心地す。

花散りて 身の下やみや ひの木傘

夜半

「檜傘の辞」 蕪村編「花鳥篇」

一七八二(天明二年)刊 所収

「とやせまし」は「できたらあめしたい、こうしたい」の意で、「煙霞花鳥に辜負する」とは「旅をすることや自然に親しむことに背を向けること」の意です。生きるためにあくせくとした毎日を送り、いっしょか風流なことも忘れ、旅にも出ず自然から遠ざかった生活をしているとは筆者には耳の痛い言葉ですが、「今さら我のみ愚かなるようにて、人に相見えん面もあらぬ心地す」は一年後に自らの死を控えた蕪村の老いの悲哀が漂っています。

句にある「身の下やみ」は「木の下闇」からの造語で「我が身自身によって成された闇」の意で、風雅からは疎遠となったおのれを自嘲した表現です。重苦しい老いの影が蕪村の心には濃厚にあつたようです。蕪村の老いと恋への向かいかたをうかがわせる文章をもう一つ。

几董の「老いそめて 恋も切なれ 秋の暮れ」の句を蕪村が判した文章です。

恋ほど切なるものはあらじといへるに、老いが身の事々物々に親切なる。

いはんや、人の聞くをはばかりも、「年半百二過ギテ 意二カナハズ」といふがごとく、かく老が恋の切なれども、秋の暮の、そぞろもの悲しき、「眇々

(びょうびょう)タル悲望 思ヒヲ如何(いかん)セン」と、「も」の字をもて自問自答せるなり。

「親切」は「痛切だ」の意で「眇々」は「広くて果てしないこと」という意です。

この文章は几董の句の批評というよりも蕪村自身の「人の聞くをはばかり」ような「老いが恋」が「悲望」であることの悩みを漏らしたものと見えそうです。蕪村は自分の老いを強く意識すればするほど、その恋が悲しく切なるものであることを痛いほど感じていたに違いありません。老いと恋。自問自答の繰り返しです。

## 五

華やかな柳巷花街を舞台にした蕪村の小糸に対する「老いらくの恋」は、蕪村の周辺や門人の間に少なからざる不安を振りまいたようです。煩惱に身を焼く蕪村を門人として、知人・友人として

たとえば蕪村六十八歳の一七八三(天明三)年四月のことです。一門の長老で儒者の樋口道立は蕪村に「いい加減になさい」と苦言を呈しました。四月二十五日付の次の書簡はそれへの蕪村の返事です。

青楼の御異見、承知いたし候。ごもつともの一書・御句にて、小糸が情も今日限りに候。よしなき風流、老の面目を失ひ申し候。禁ずべし。さりながら求めて得たる句、御批判下さるべく候。

妹が垣根の 三味線草の 花咲きぬ

これ、泥に入りて玉を拾うたる心地に候。

「青楼」とは祇園の妓楼のこと。道立は蕪村に「小糸ときっぱり別れなさい」と

「異見」(「意見」と同じ意味で使っている)したのでしよう。この門人からの忠告に対して蕪村は「承知いたし ↓ ごもつとも ↓ 小糸が情も今日限り ↓ よしなき風流 ↓ 禁ずべし」ときわめて素直に従っていますが、まだまだ蕪村の心には煩惱がいっぱいです。

小糸との恋を「よしなき風流」によって老の面目を失ったと自嘲はしています。この恋を悔いてはいません。書簡の末尾で「さりながら求めて得たる句」として、初めて小糸に出会ったころの句をあげて、これは「泥に入りて玉を拾うたる心地」だとしています。小糸との夢のような恋が終わってしまふと残るのは泥にまみれた自分の老いたる姿だけ。ただ、その時に得た句だけが燦然と輝いているという訳です。悲しく、寂しく、やるせない感情ですが、文人蕪村の心意気というべきでしょう。

この道立への書簡の後、五月十三日付の佳棠への手紙には「お互いに南柯(なんか)の一夢、覚め候時節をかしく候」と小糸との恋が「南柯の一夢」に終わっ

た思いを書いています。「南柯の一夢」

とは、昔、唐の人が酒に酔って大樹の下で眠って夢を見、大槐安国に行つて南柯郡の長官となり二十年を経たところから覚めて、槐の木の下を見ると、それが蟻の国であったという話。この話は人生のはかなさの譬えでよく用いられます。

「お互い」とあるので佳棠も同じ頃につたかもしれせん。

それにしても小糸との別れは蕪村の決断によつてされたものなのでしょうか。やはり若い祇園の妓女の小糸が老いたる蕪村を本気で恋していたとは考えにくく徐々に小糸の心は蕪村から離れていったと考えるのが一般的でしょう。

先ほど触れた佳棠への手紙の末尾に次の句(おそらく佳棠の句です)が「感慨に堪えず候」の言葉とともに書かれています。逃げていく螢を小糸の幻影とみればこの句は蕪村の気持ちに代弁したものと見え、だからこそ「感慨に堪えず」という言葉を漏らしたのでしよう。

逃げ尻の 光り気疎(けうと)き 螢かな 螢が尻を光らせながら闇の中に去っていくさまは小糸が遠ざかっていく寂しさと重ねて蕪村はこの句を見ていたと考えられます。この句からは蕪村のもとから去っていく小糸の尻の白々しき、憎らしき、

うとまじさが感じ取れます。もはや若さを失った老いの悔しさです。祇園の妓女のしたたかさ、蕪村の老いの孤独感が蛍の消えていった深い闇に表現されています。「分かってはいたんだけどね」「しかしね」と何度思っても残る心の重さ。柳老いて春はなお深けれど日はすでに斜めなり、という思いの重さです。

## 六

では、蕪村は小糸との交遊をどう考えていたのか。

蕪村の誘いに応じて芝居見物や遊山に同行したり、料亭や茶屋での宴席に侍ったり、時には二人だけの語らいを楽しんだり、というありさまは芸妓となじみの客との遊びという風景に見えます。たしかに蕪村と小糸との年齢差は祖父と孫ほどの隔たりがあり、常識的な図式でいえば蕪村の振る舞いは老人が孫ほどの若い女性を偏愛するドン・ファンと見られるだろう。しかし、小糸を偏愛する蕪村には世俗の見方を超えるものがあつたと考えられます。

先ほど紹介した佳業への手紙で「『礼(らい) 人が守るべき社会のルールのこと』ばかりにては上下不和に候。『楽』といふ物なくては天下も治まらぬもの」とギチギチとした生真面目な精神よりも精神の自由さこそを重視した蕪村です。すでに述べたように自分の恋を「よしなき風

流」のため老の面目を失つたと自嘲していますが、「よしなき風流」を否定してはいません。時として世間のルールからはずれる人間のありようを微塵も動かぬ木石以下だとしながらも、それが人間の生ののだと考え、精神の自在さを人間の生の根源と考えていた蕪村です。これまでの放蕩を昂然と肯定し、開き直つていたことでしょう。

晩年の蕪村にとって小糸の存在は、現実に直面している老境を忘却させ、ややもすれば何事も無精になりがちな俳業や画業への意欲をかきたたせてくれるエネルギー源でもあつたでしょう。



## 隠された歴史(33)

満田 正賢

前回は、山崎仁礼男氏の『蘇我王国論』をもとに、天武天皇以前の各天皇の實在を裏付ける船首王後(ふねのおびと)および、小野毛人(おののえみし)、威奈大村骨臓器(いなのおおむらこつぞうき)の各墓誌は、いずれも後代つくられたものであり、日本書紀持統紀五年(六八一)八月の「一八の氏に大三輪、雀部・石上・藤原・石川・巨勢・膳部・春日・上毛野・大伴・紀伊・平群・羽田・阿倍・佐伯・采女・穂積・安曇に詔して、其の祖等の墓記を上進らしむ」という詔の目的は、日本書紀編纂の為の原史料の収集ではなく、日本書紀による歴史の創作の為に都合の悪い墓誌を廃棄する為だったということについて述べました。

今回は、近畿に残るもう一つの金石文である寺院の銘文が、墓誌と同様に後代つくられたものであるということ考察します。

まず、法隆寺の薬師仏の光背銘です。「池辺の大宮に天の下治らす天皇(用明天皇)、大身勞き賜う。時に歳次丙午の年(用明元年11586)、大王天皇(推古天皇)と太子(彦人皇子)を召して誓願したまう。『我が大病氣、太平ならむと欲い座す。故、寺の薬師像を造り作り、仕

え奉らむ』と詔す。然るに、時に当たりて崩じ賜い、造り堪えざれば、小治田大宮に天の下治らす大王天皇(推古天皇)及び東宮聖王(聖德太子)、大命を受け賜いで、歳次丁卯(推古十五年11607)、仕え奉る。」

山崎氏は、この銘文が後代作られたものであることの論拠を多く示しています。①この仏像は飛鳥仏ではないとされていること。②「池辺大宮治天下天皇」で使われている「天皇」という用語の開始時期には諸説あるが、早くても孝徳期からであること。③「小治田大宮治天下大王天皇」の表現は過去の天皇を指す用法なので、作成時期として記されている推古期にはまだ行われていないこと。(町田甲一著『法隆寺』より)④「然当時崩、造不堪者(然るに、時に当たりて崩じ賜い、造り堪えざれば)」の「者」は漢籍では類例をみない用法であり、六〇七年段階では「ば」の表記として「者」を用いたとは考えがたく、後代のものと見なさざるを得ないこと。(瀬間正之氏「記紀の文字表現と漢訳仏典」より)。以上の論拠により、山崎氏は「法隆寺の薬師仏の光背銘は後代作られたものである」と断定しています。

山崎氏は次に元興寺の丈六釈迦仏光背銘(この光背銘は現存しておらず、元興寺伽藍縁起并流記資財帳(元興寺縁起)の中に書写されているもの)を取り上げ

ています。

「丈六光銘に曰く、天皇、名は広庭（欽明）、斯掃斯麻宮に在る時、百濟の明王、上敬して、『臣聞く、所謂仏法は、既に是れ世間無上の法。天皇も亦応に修行すべし』と。仏像・経教・法師を撃奉す。

天皇詔す。『巷哥（蘇我）、名は伊奈米（稲目）の大臣、茲の法を修行せよ』と。

故に仏法、始めて大倭に建つ。広庭天皇（欽明）の子、多知波奈土与比天皇（用明）、夷波礼の瀧辺の宮に在り。任性広慈、三宝を倍重し、魔眼を損棄し、仏法を紹興す。而して、妹の公主、名は止与弥拳哥斯岐比弥天皇（推古）楷井の等由羅に在り。瀧辺天皇（用明）の志を追盛し、亦三宝の理を重んず。命を掛み、瀧辺天皇の子、名は等与刀弥々大王（聖徳太子）、および巷哥の伊奈米の大臣の子、有明子（馬子）の大臣、道を諸王子に開き、緇素を教える。而して百濟の惠聡法師・高麗の惠慈法師・巷哥の有（明子）の大臣の長子、名は善徳を領となし、以て元興寺を建つ。（推古）十三年、歳

次乙丑（六〇五年）四月八日戊辰、銅二万三千斤・金七百五十九兩を以て、尺迦丈六像・銅繡二軀并に挟侍を敬造す。高麗の大興王、方に大倭に睦み、三宝を尊重し、遙かにもって随喜し、黄金三百二十兩、大福を助成し、同心に結縁し、願わくば茲の福力を以て、登遐の諸皇遍および含識、信心有りて絶えず、面りに諸仏を奉ずれば、共に菩提の岸に登り、速

かに正覺を成ぜん。歳次戊辰（六〇八年）、大隋国の使主、鴻臚寺の掌客裴世清、副尚書、祠部の主事遍光高等、来たりて之を奉ず。明年己巳（六〇九年）四月八日甲辰、畢竟して元興寺に坐す。」

山崎氏は古田武彦氏が「古代は輝いていたⅢ」で展開した、「元興寺縁起に記された丈六釈迦仏光背銘は、九州王朝にあった丈六釈迦仏光背銘が改竄されたもの」という説を紹介していますが、私は「丈六釈迦仏光背銘は蘇我氏の功業を記していた光背銘が改竄されたもの」と考えています。

古田氏は『丈六光銘』の文章の中に「畢竟して元興寺に座す」という一句があり、これをもって丈六仏が九州王朝から『原光背銘』が改竄された上で法興寺に移されたのであろう」としていますが、この考察の最後に補足として括弧付きで「原光背銘には、蘇我氏の功業が賛美されており、『新作光背銘』では、これらがカットされた、という可能性もありえよう。」と付け加えています。

元興寺（＝飛鳥寺＝法興寺）は蘇我馬子が発願した蘇我氏の氏寺ですが、元興寺縁起にはそのような記述は一切ありません。元興寺建立は用明天皇が推古天皇と聖徳太子に「我が国には尼寺はあるが、法師寺がないので、法師寺を建てる場所を探そう」と命じたところから始まること記載されています。まさしく元興寺縁起全体が蘇我氏の功業を隠蔽しています。

従って「元興寺縁起に記された丈六釈迦仏光背銘は、蘇我氏の功績を記していた光背銘が改竄されたもの」と考える方が自然であると考えます。

次に元興寺（法興寺）の露盤（仏塔の土台部分）名です。これも現存するものではなく、元興寺縁起の中に書写されているものです。

「大和国天皇、斯掃斯麻宮に天の下治ろしめす名は阿米久尔意斯波羅岐比里尔波弥己等（欽明）の世、巷宜（蘇我）名は伊那米（稲目）大臣の仕え奉る時、百濟国正明王啓して云う。『万法の中仏法は最上なり』。是をもつて天皇は大臣と并にこれを聞こし食し、『善きかな』と宣い。即ち仏法を受け、倭国に造立す。然して、天皇と大臣は盡に報業を得受くる。

故に天皇の女佐久羅韋（桜井）等由良宮に天の下治ろしめす名は等已弥居加斯支夜比弥の弥己等（推古）の世、及び甥の名は有麻移刀等已刀弥々の弥己等（聖徳太子）の時、巷宜名は有明子（馬子）大臣の仕え奉り、領と為し諸臣等に及びて、讚えて云う。『魏々乎、善かな善かな。』』戊申（崇峻紀元（五八八）年）に始めて百濟寺（国の誤り）の名は昌王に法師及び諸仏等を請う。・・・丙辰（推古紀四（五九六）年）の年十一月に既わる。・・・」

山崎氏は、この露盤名は丈六釈迦仏光背銘と一緒に後代書き替えられたもので

あり、内容的には「書紀」と一緒であるとしています。そして、飛鳥の法興寺の本物の露盤名は寺院の屋根の相輪こと叩き壊されたのではないかと想定しています。

次に法隆寺（中宮寺）の天寿国繡帳（てんじゅこくしゅうちょう）銘文です。

「斯掃斯麻宮に天の下治ろしめす天皇、名は阿米久尔意斯波羅岐比里尔波の弥己等（欽明）、巷宜大臣名は伊那米（蘇我稲目）の女、名は吉多斯比弥の弥己等（堅塩媛）を太后となして、名は多至波奈等已比の弥己等（用明）、と妹の名は等已弥居加斯支移比弥の弥己等（推古）を生む。復、太后の弟の名は乎阿尼の弥己等（小姉君）を娶りて后となし、名は孔部間人公主（泥部穴穂部皇女）を生む。斯掃斯麻宮天皇の子、名は蕤奈久羅乃布等多麻斯支の弥己等（敏達）、庶妹の名は等已弥居加斯支移比弥の弥己等を娶りて太后となし、乎沙多宮に坐して天の下治ろしめし、名は尾治王を生む。多至波奈等已比の弥己等、庶妹の名は孔部間人公主娶りて太后となし、瀧辺宮に坐して天の下治ろしめし、等与刀弥々の弥己等（聖徳太子）を生み、尾治大王の女、名は多至波奈女郎女（位奈部橘王）を娶りて后となす。歳在りて辛巳十二月廿一日癸酉

の日に孔部間人母王崩す。明年二月廿二日甲戌夜半に、太子崩す。時に多至波奈女郎女悲哀嘆息し、畏き天皇の前に申

して曰く、『是を敬に、恐れあれども、懐う心は止み難し。我が大王と母王とは期したる如く、縦遊せり。痛く酷きこと比するなし。我が大王の告ぐるところ、世間は虚仮にして唯仏これ真なり。其の法を玩味するに、我が大王は応に天寿国の中に生まれしと謂えり。而かれども彼の国の形を眼に看がたきところ、希はくは像を図くに因りて、大王の往生の状を觀つらんと欲す』と。天皇これを聞きて

悽然として告げて曰く、『一の我が子敬すところ誠に以て然りなり』と。諸の采女等に勅して、繡帳二張を造らしむ。畫者は東漢末賢・高麗の加西溢、又漢奴加己利、令者は棕部秦久麻。』

山崎氏は、この繡帳銘文は法隆寺釈迦三尊像の光背銘を下敷きとして作られているが相違点はあると指摘します。第一に、光背銘の鬼前太后と繡帳銘文の穴穂部間人皇女は推古二十九年十二月まで同じですが、繡帳銘文には日付干支が加わっているという点です。第二に、光背銘が鬼前太后・王后・上宮法王の三人はほぼ同時に死んだとする一方で、繡帳銘文は穴穂部間人皇女と聖德太子の死は載せていますが、王妃の死は載せていないという点です。第三に、一人欠けた光背銘の王后の没月日を、繡帳銘文では穴穂部間人皇女の没月日として載せている点です。山崎氏は野中寺弥勒菩薩像の造像銘も同様に後代作られたものであるという立場で考察しています。

「丙寅四月大旧八日癸卯開の記す。栢寺の知識等、中宮天皇の大御身勞き坐しし時に詣り、誓願し奉る弥勒の御像なり、友等人数一百十八、是に依りて、六道の四生の人等を、此の教に相く可き也。」

山崎氏は、その根拠として①銘文に「丙寅四月大旧八日癸卯開の記す」とあるが、「旧」すなわち旧暦と呼ぶのは、新暦が使用された持統四年以降に書かれたものである。(東野治之氏説)②注目すべきは、薬師寺東塔檨銘の銘文の寺院側の伝承が、「薬師寺塔の銅檨に銘あり、相伝う、舍人親王の書なり」と(大日本史)となっていることである。③野中寺弥勒菩薩像の造像銘の「中宮」の文字が薬師寺東塔檨銘の銘文「中宮(天皇)」と共通していることをあげています。

しかし、山崎氏が引用した東野氏の考察に対して、古田史学の会の服部静尚氏は「野中寺弥勒菩薩像の造像銘の『旧』の字は実物を見ると『朔』の字を崩した字のように見える。『旧』ならば当時では旧字である『舊』が書かれていなければならぬ」と反論しています。日本書紀が月日を記す場合、通常『朔』(その月の一日)の干支が記されていますので、私も服部説に賛成です。又、山崎氏は「中宮天皇」のことを造作された斉明天皇のことであると考えています。服部氏は、「中宮天皇」の「中宮」が皇后の意味を持つのは聖武朝以降であり、「中宮天皇」は大安寺縁起に記された「仲天皇」や万

葉集に出てくる「中皇命」と同一人物であり、持統期に、日本書紀が隠した「中宮天皇」という人物がいたのではないかと主張しています。

最後に、日本書紀編集関係者による「書紀」のアリバイ作りという山崎氏の仮説について触れます。山崎氏は、「宇治橋造橋碑には『統紀』に文武天皇四年に作られたと書いてあるのに、『大化二年に作られた』と記されている。造橋の人物名も『統紀』は和尚(道昭)が作ったと書いているのに造橋碑には『道登』が作ったと記されている。一般にありえないとされる金石文になぜ二箇所も誤りが生じたのか」と問いかけ、『宇治橋造橋碑』も『船首王後の墓誌』も『元興寺の丈六釈迦仏光背銘』と同じデストラクション・アンド・イミテーション(破壊と模造)であり歴史改竄の為のアリバイ作りと考えられる。」と結論づけています。山崎氏が取り上げた個々の寺院の銘文については、元興寺丈六釈迦仏光背銘や野中寺弥勒菩薩像の造像銘など異論のある部分もありますが、「デストラクション・アンド・イミテーション」が行われたという結論については私も賛成です。

## 「道をゆく」(27)

### 「熊野街道」(二四)

成瀬 和之

③発心門王子から熊野本宮大社へ  
熊野古道ウォーキングで最も人気のあるのが本コースです。

発心門(ほつしんもん)王子は同名のバス停から三〇〇メートルの所にあります。「発心門」つまり「悟りの心をひらく入口」とされた格式の高い五躰(ごたい)王子の一つです。かつて熊野詣の旅人は発心門王子から本宮の神域に入ると認識し、発心門を潜ることに大きな意義を見出していました。歌人の藤原定家は一三世紀初め、四〇歳の時に後鳥羽上皇の熊野御幸のお供をし、「先駆け」を務めました。各王子における儀式的執行、食事・宿舎の手配などを行う総務的役職で、夜遅い歌会にも出ました。「入りがたき み法の門はけふ過ぎぬ 今より六つの道にかへすな」という歌を柱に書きつけました。仏法の門を潜ったからにはもう引き返さないという、決意と感激を歌ったものです。

発心門王子からバス停まで引き返し、案内標識に従って右手の道に入りまぐらバス道とほぼ並行する舗装路の旧道を進み、緩い坂を下りると水呑王子があります。古来湧き水のあった場所で旅人の喉を潤してきたと言います。王子碑の隣に

二体の地蔵が並び、向かって左は腰痛地蔵と呼ばれ、腰の所で上下に割れています。その間に賽銭を入れて祈ると腰痛に効くのだそうです。昔から腰痛で苦しんだ人が多かったのです。

水呑王子から先は、古道らしい林の中の道となります。その途中で「道休禪門（どうきゅうぜんもん）地蔵」と呼ばれる石仏に出会います。昔この辺りで行き倒れた巡礼者を供養したもので、今も地元の人々が大切に守っています。

林を抜けると、伏拝集落。そこからは里山越しに、小辺路のルートである果無（はてなし）山脈の雄大な景観が望めます。茶畑に囲まれた道沿いに、地元の人達が営む伏拝（ふしおがみ）茶屋があります。まろやかな味わいの温泉コーヒーを飲んで一休みできます。茶屋の前の石段を登ったところが伏拝王子跡で、山並みの間から、はるかに本宮大社旧社地の大斎原（おおめのほら）を見ることが出来ます。

昔、熊野参詣の人々は長い旅路の末、ここで初めて聖地を目にし、感激のあまり「伏し拝んだ」のが王子名の由来と言われます。またこの王子には和泉式部にまつわる伝説もあつて供養塔が立っています。

恋歌の名手と言われた和泉式部が熊野詣の途次、伏拝王子まで来て月の障りとなった。不浄の身では本宮に参拝出来ないときあらぬ、「晴れやらぬ 身のうき雲とたな

びきて 月のさわりになるぞかなしき」と詠んだ。そして一行が参拝を済ませて再び戻って来るのを待とうと伏拝に泊まったところ、熊野の神が夢に現れて、「もとよりも塵にまじはる神なれば 月のさほりも何かくるしき」という歌を返してきた。差支えないから参拝せよという、この夢のお告げのおかげで彼女も本宮に参拝できたという。

名高い女流歌人の伝説に託して、「浄不浄を嫌わず、信不信を問わず」という熊野の神の寛容さをPRするこの話は、熊野比丘尼（びくに）達によって全国に広められたでしょう。当時の信仰の山の多くが女人禁制だったのに女性も大歓迎というのですから、中世になって熊野詣は庶民に広まっていくことになりました。

伏拝王子を過ぎると本宮大社の手前まで山道が続きます。多少は上り下りもありますが傾斜は緩く歩きやすい道を二〇分ほど進み、九鬼ヶ口吊橋を渡ると三軒茶屋跡です。ここは高野山へ向かう小辺路と中辺路の分岐点で、昔は三軒の茶屋が営業していました。この場所には現在「右こうや 左きみい寺」と刻まれた石の道標が残る他、付近にあつた九鬼が口関所の門が復元されています。茶屋は残っていませんが休憩所が整備されています。ここから本宮大社まであと二キロメートルの道のりです。

茶屋跡を出ると小さな上り下りを繰り返しながら、林の中の道を下って行きます。途中「ちよつとより道」の標識に出会います。やや急な階段を一〇分も登ると展望台です。右下方に大斎原の大鳥居を見ることができ、天気が良ければ寄り道をする価値があります。さらに古道を進むと、やがて林を出て舗装路となり、やがて遠くに熊野本宮大社の杜が見えてきます。大社と近接する大樹の陰に、本宮大社への最後の王子となる祓殿（はらいど）王子跡があります。石造りの小祠が祀られています。この王子は、長かった道中の汚れ穢れを払い、身を浄めて本宮大社に参拝するための禊の場です。昔の参拝者は、ここで禊を済ませてから大社へ向かったと言います。本宮大社の裏入口の鳥居に出合い、そこを潜ると熊野本宮大社の静かな境内に入ります。

熊野本宮大社は、約五〇〇メートル南の熊野川の中州・大斎原（おおめのほら）にありましたが、一八八九年大水害に遭い、二年後に現在地に遷されました。主神は家都美御子大神（けつみみこのおおかみ）。素戔鳴尊（すさのおのみこと）と団体とされ、木の神、食の神などと崇められています。この神を含め速玉・那智大社と同じ十二柱の神々「熊野十二所権現」を祀ります。平安時代に神仏習合思想を背景に、熊野三山として速玉・那智大社と一体化したのです。

神門の奥に三棟四殿からなる本殿が東

西横一列に厳かに並び立ちます。主祭神は神門の正面に位置する第三殿（証誠殿）に祀られ、左の合殿の第一・二殿に那智と速玉の主祭神、右の第四殿に天照大神を祀ります。これら三棟の本殿は、明治の大水害で流出を免れ現在地に遷されたものです。一九世紀初頭の建築ですが、社殿の形式や配置は平安期の参詣者の日記や鎌倉期に描かれた絵画と合致し、国の重要文化財に指定されています。

平安時代の皇族や貴族に始まる熊野詣はやがて武士・庶民へも広まり、熊野三山は「日本第一大霊験所」と仰がれました。なかでも、本宮の本地仏は極楽浄土に導く阿弥陀如来とされたことから、特別の信仰を集め、本宮だけの参拝で済まず熊野詣も少なくありませんでした。

## マルクスから学ぶ (5)

成瀬 和之

前々回は、マルクス・ガブリエルを通して「思想の逆立ち」について考えてみました。そして前回は「政治の逆立ち」でした。「政治の逆立ち」を考えると、ドイツとは違う困難が日本にはあります。今日は、日本の民主主義の到達点を歴史

的に振り返ってみましょう。日本はこれまで「市民革命」「民主主義革命」を経験したことがあるのでしょうか？

「明治維新」はどうでしょうか？一八六八年に日本は「脱封建革命」に踏み出しましたが、日本における民主主義革命をめざした自由民権運動は、秩父事件など「激化諸事件」で挫折し、一八八九年に制定された大日本帝国憲法は神権天皇制を明記した天皇主権の憲法でした。そもそも明治維新のスローガンは「尊王・攘夷」だったのです。明治憲法の行き着く先がアジア・太平洋戦争でした。

では、「戦後の民主化」と言われる「戦後改革」はどうでしょうか？

戦後改革は教育改革に典型的にみられるように、占領軍・政府そして旧来の行政組織を通じて、主として「上から」の改革指示で進められた側面が強かったのです。教職員組合運動の始まりでさえ、組合の結成やその後の運営でも校長がその中心を担いました。ほんの一年半前まで「本土決戦」「皇国不敗」の訓話をしていた同じ校長が、今度はゼネストの趣旨について児童や親に訓話するというのも決して珍しい光景ではありませんでした。詳しくは「ボクらの村にも戦争があった」（田中仁著、文理閣、二〇一二年）参照。

もう一つ例をあげましょう。「天皇の名において」裁かれた冤罪事件である「大逆事件」について、最高裁判所は一九六

七年再審請求を棄却し、そのままの状態です。今日に至り三権による名誉回復は行われていません。日本の民主主義の到達点を示すバロメーターが「歴史認識」でもあるのです。韓国の文大統領は五月一八日自身の交流サイト（SNS）で、一九八〇年の軍隊が民衆を弾圧した光州事件について、「今日のミャンマーにきのうの光州を見る。光州がミャンマーの希望になることを切に望む」と述べました。日本の「大逆事件」の名誉回復はどこまで進んでいるのでしょうか？

油井大三郎は、「未完の占領革命」（東京大学出版会、一九八九年）の中で、戦後改革は、「精神革命が未完の政治革命」だったと総括しています。現代日本における「歴史修正主義」との対決も、この「未完の精神革命」の「完遂」に向けた国民的努力の一環として考える必要があるでしょう。

政治学者の白井聡は「主権者のいない国」（講談社）という本を出しました。未読なのですが、日本における主権者形成の現段階を想像させる題名です。日本の国民が主権者となる「民主主義革命」はようやく始まったばかりだと肝に銘じて、本腰を入れて、一步一步着実に「政治の逆立ち」を是正していかなければならないでしょう。「赤木ファイル」は、その一步を歩み出す苦悩を示しています。

俳人の長谷川權は「文学部で読む日本国憲法」（ちくまプリマー新書、二〇一六年）を次の言葉で結んでいます。

「日本国憲法が求める三つの言葉（民主主義、平和主義、基本的人権）を、戦後の日本人はどれだけ習得できたのか。いまだ習得したとはお世辞にも言えません。終戦から七〇年が過ぎたにもかかわらず、日本の戦後はまだ始まったばかりです。」

残念ながら、日本の民主主義の到達点を示す言葉として同意せざるを得ません。

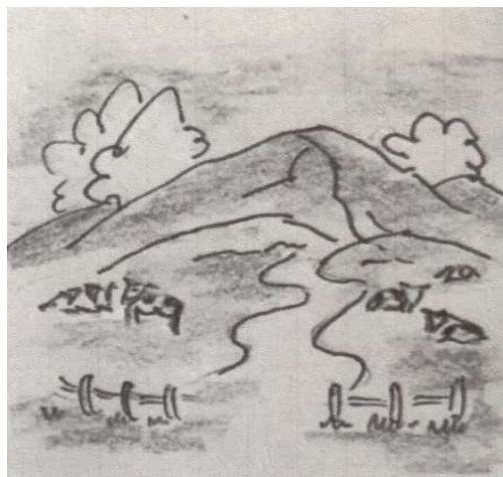
俳句

土田 裕

麦秋や芳しき香のオーク樽  
防疫のマスク外せば風薫る  
今更に自由の値打ち町薄暑  
酒を飲み書を読みひそと籠もる夏  
朝靄に射し込む日矢や夏木立

影山 武司

胸ボタン二つをはだけ団扇風  
噴水の水のとどまる高さかな  
土塊の匂ひにむせて蠅螂生る  
たまゆらの恋の灯りを初螢  
螢火を追ひて消えたる出逢ひ橋  
川床（ゆか）涼み東山より紺に暮れ  
才べ室の冷房の漏れ椅子固し  
蟠る雲の戸惑ひ戻り梅雨  
初蟬の互ひの距離を測りつつ  
蟬時雨朝練前のグラウンド





▼オリンピックの開会式の日が近づいている。連日のように報道される五輪への準備状況も、たとえば「バブル方式」に穴があつた、というように国民に安心を与えるものではない。しかもジワジワと新型コロナウイルスの感染者数は増えていき、デルタ株、そしてラムダ株とウイルスの新手は次々に登場する。ただ一つの頼りであるワクチンは「一日百万回接種」の大号令のもと多くの自治体や職域で準備され実施されはじめたが、ワクチンの供給不足がここに来て判明した。まさに腰砕けである。「はしごを外された」と怒る関係者も多いと聞く。▼「政治家は結果責任。オリンピックを信念でやられても感染が広がったら誰が責任を取るのか」と容赦のない言葉を発したのは上野千鶴子さん。NHKの番組「100分de名著」でポーヴォワールの著作「老い」について語っているとときに飛び出した言葉である。報道されるニュースはもはや政府の発行する官報と化したNHKの番組である。よくぞこの部分をカットしなかったものだ。制作担当のその後が少し心配だが、まだNHKには公共放送たる良心が残っているのかと認識を新たにしたい次第。▼上野さんの言うとおり政治は結果責任である。動機よりも結果が重視される。行為の結果を誰かに転化すること

なくそのすべてを自ら引き受ける気概がなくては政治家という職業は務まるまい。かつて社会学者のマックス・ウェーバーは政治家の資質には三つあるといった。一つは今述べた「責任感」。二つは「情熱」。自分が解決すべき問題についてどこまでも取り組む情熱である。そして三つは「判断力」。権力者になりたいという自らの虚栄心を克服して解決すべき問題に客観的に取り組むための冷静な判断力である。▼人事をテコに最高権力者に駆け上ったスターリンをもじって「スガーリン」と呼ばれたこともある我らが首相は確かに開催に向けての執念は見せるが、新型コロナウイルスが蔓延し国民の不安がつのる中、なぜ五輪を開催しなければならぬのか、その理由を語ろうとしない。それを語る責任は自分にはないと考えているとしか見えない。閣僚に至っては専門家の意見を嘲笑し無視する発言が相次いだ。冷静な判断力の有無が問われるだろう。今さら言うことでもないが、まさしく政治の貧困。今、五輪とコロナをめぐる言葉の発しようとするれば出てくるのは憤りばかりである。▼森まゆみさんによれば東京の下町の知恵には「悪く言つときゃ、まちがいない」というのがあるそうだ。「悪口を言つてはいけません」とは山の手の勤め人の倫理観。狭い空間に人がビッシリという下町ではそうはいかない、というわけだ。ストレスの多い世にあって外の世界はいざ知らず家に帰ったから

には腹の中にとまった鬱憤を思いつきりぶつけなければ精神の病になるというものの。街で出会った人への悪口、国民に背を向け続ける政府への悪口。たまったガスを抜かなくてはやっていられない。「安心・安全っていうけど、口ばっかり。感染が広がったらどうするんだ。どうせ責任取る気なんかないだろ」「自粛、自粛つて、他に言葉はないの。無能・無策すぎる」と悪口は次々とあふれ出てくる。耳にしてウンザリとする悪口は多々あるが、世間や人の偽善・ウソを見抜き辛辣な言葉で切つて捨てる悪口は聞いていてもスカツとする。先ほどの上野千鶴子さんはそうした悪口の達人である。批判は針の如く鋭くかつ聞く人の心をパツと明るくさせる悪口。かくのごとき悪口を発しうる名人にもつとお目にかかりたい。▼悪口の極めつきは何といつても「褒め言葉」であることは御存知だろうか。「あなたは本当にきれいだ好きで片づけ上手ね」といわれると筆者などは一番こたえる。「だからしない」「散らかし屋」「汚し名人」「汚部屋のあるじ」と悪口を言われるよりも辛い。ために我らが首相に誰かが「いよ、演説の名人。あのリンカーンの再来」と言ったら、彼はどんな顔をするだろうか。一度、見てみたい。

モット高ク

一八九〇年（明治二十三年）四月四日、間もなく四十歳になろうとしていたラフカディオ・ハーン（後の小泉八雲）は、日本の横浜に着いた。三月五日にニューヨークを出発、モントリオール経由、大陸横断鉄道「横浜号」で太平洋岸へ。三月十七日、カナダのバンクーバーから横浜行きの汽船アピシニア号に乗船、十八日の船旅であった。

その六年前、ハーンは、ニューヨークリンズ百年記念博覧会で日本の展示責任者であった服部一三（後の文部省普通学務局長）に出会い、日本の心とかたちの魅力に取りつかれている。ニューヨークの雑誌『ハーパス・マンズリー』に旅行記を書くひと月の仕事の契約で、ようやく日本の地を踏んだのである。再会した服部と部下・西村との会話。

ハーン「船でー（と静かに話し出す）」

服部「（英語で）船で？」

ハーン「イエス（日本語で）フネ

ノウエ」

西村「（英語で）ええ」

ハーン「朝」

服部「（英語で）ええ」

ハーン「富士山が見えるといわれ  
ました」

服部「（英語で）おう」

ハーン「私は、急いで、すぐ甲板  
に出来ました」

服部「（英語で）ええ」

ハーン「しかし、一面にガスがあ  
つて富士山はみえませ  
ん」

西村「（英語で）それは残念」

ハーン「目の上に手をかざし」見  
えないじゃないか（日本  
語で）誰、ユウタカ、見  
エル、マウントフジ」

服部「（英語で）ええ」

ハーン「すると、声がありました。  
もつと高く（日本語で）  
モット高ク」

西村「（英語で）ええ」

ハーン「私は（かざしていた手を  
とつて高いところを見  
て）目を上げました。す  
ると、富士山が見えまし  
た。高いところに、頂上  
だけが見えました。そん  
なに高いとはおもって  
いませんでした」

服部「（英語で）それは、よかった」  
ハーン「（日本語で）モット高ク（微  
笑して）私は、このあた  
りしか見ていませんで  
した（と手をかざして見  
せ）ところが、富士山は、

こんなに高いところに  
ありました。高いところ  
を見る」

服部「（うなずく）」

ハーン「私は、自分の精神のこと  
を言われたように感じ  
ました」

服部「（英語で）おう」

西村「（うなずく）」  
ハーン「（日本語で）モット高ク」

五月、ハーパ社との契約解除。  
七月、服部の紹介で松江の島根県尋  
常中学校並びに尋常師範学校の教師  
となる契約を結ぶ。月俸百円、島根  
の中学校長の月俸は九十円であった  
という。

その後、ハーンは、松江、熊本、  
神戸、東京と移り住む。維新後の日  
本は文明を開花し、富国強兵を推し  
進め、ひたすら西洋に追い付こうと  
していた。後で振り返れば四年後に  
清国と、その十年後にはロシアと戦  
争をするまでの国になる。日本は、  
古き良きものを褒め讃え、日本の心  
とかたちなどにかまっている時で  
はなかったのである。

そんな時代の狭間で、ハーンは、  
失われゆく日本の面影を見つめ続け  
た。

「蛭だって、幽霊でないとは誰に  
も言えない」とハーンは書いている  
と述べた脚本家の山田太一は、

「このような思いで闇に光る蛭を見  
た人々の感受性に比べて、いま私た  
ちが蛭を見るとき思いの、なんと  
いうつまらなさ。今更、ひき返しよ  
うもないとはいいながら、それら失  
われてしまったものをふりかえるこ  
とは、私たちは決して日々高度に文  
明化しているなどということはない  
のだと知るだけでも意味のあること  
だと思った。八雲をやりたい」と思  
い続けたという。そして、ついに一  
九八四年三月、NHK総合テレビで  
『日本の面影』が放送された。ハー  
ンを演じたのは、ロサンゼルスのお  
ーディションで選ばれたジョージ・  
チャキリス、彼は父親の代でギリシ  
ヤから来た移民。ハーンは、アイル  
ランド人の父とギリシヤ人の母との  
間にギリシヤで出生している。ハー  
ンを演じることを強く望んだという  
ジョージ・チャキリスがハーンその  
人のように思えるドラマであった。  
何度でも見たいと思うドラマが、  
テレビから消えて久しい。  
（山田太一、『日本の面影』（山田太  
一作品集14）、大和書房、一九八七  
年による）